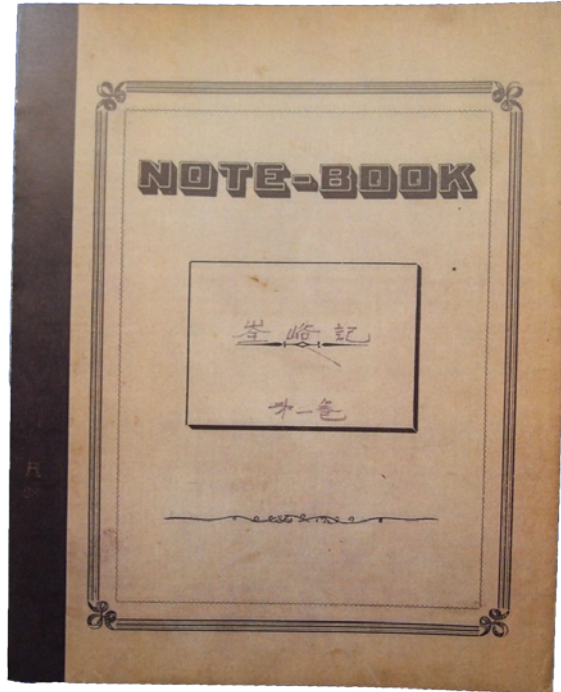


フィールド・ノート せんよく 峯峪記

F0101

あるく、ウメサオタダオ展



1933年 12歳のころ



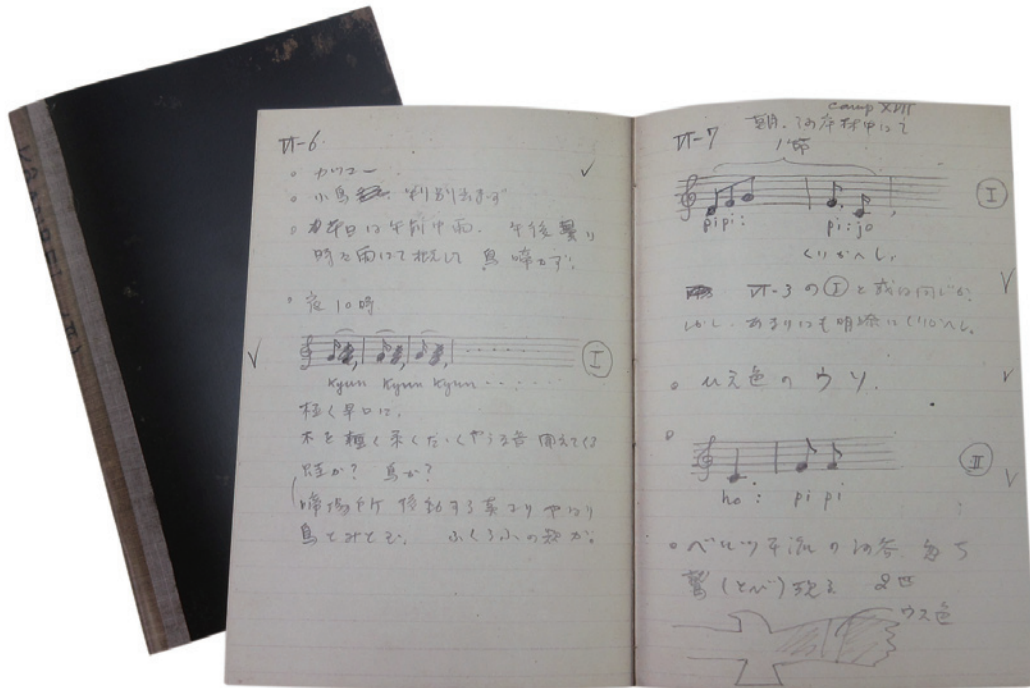
12歳のときの山あるきの記録です。

1冊目のノートは1933年1月28日に京都市松ヶ崎東山まつがさきひがしやまに出かけたときから始まっています。2冊目のノートは同じ年の6月3～4日に比良山系ひらの武奈ヶ岳ぶながたけで終わっています。およそ4カ月のあいだに出かけた17回分の山あるきのようすが2冊のノートにびっしりと記録されています。

だいこうあんれい

大興安嶺探検のフィールド・ノート F0102

あるく、ウメサオタダオ展



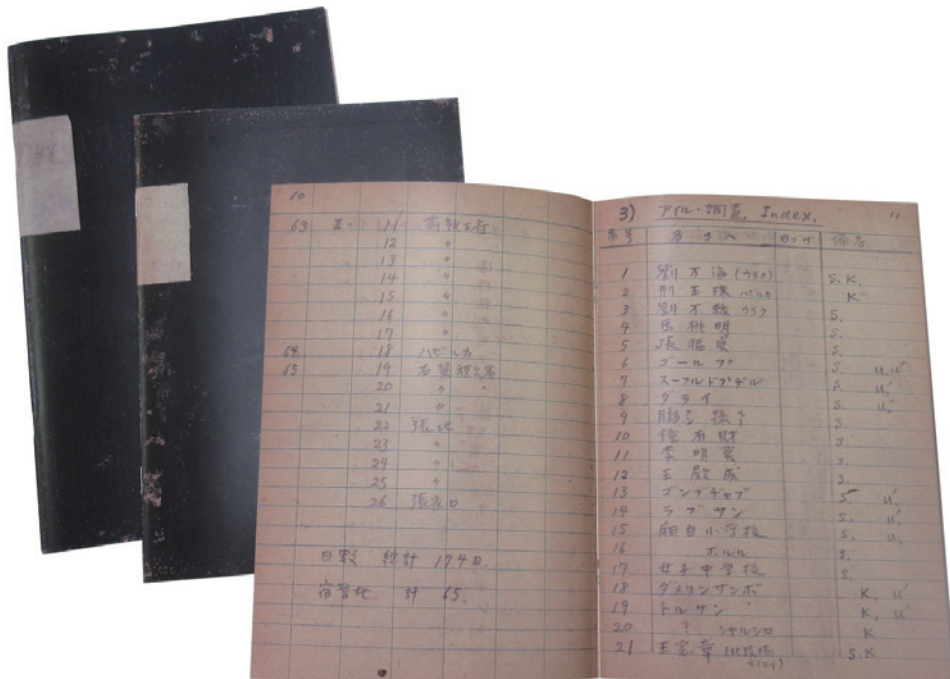
1942年 22歳のころ



大学生のとき、^{いまにしきんじ}今西錦司先生を隊長とする^{ほくぶだいこうあんれい}北部大興安嶺探検隊に参加しました。大興安嶺は中国東北部にある南北に長い山脈です。当時は地図に書かれていない部分があって、太陽を参考にしながら、自分の位置を見きわめてすすみました。フィールド・ノートには、各種の鳥の声が音符で記録されています。

モンゴルのフィールド・ノート F0103

あるく、ウメサオタダオ展



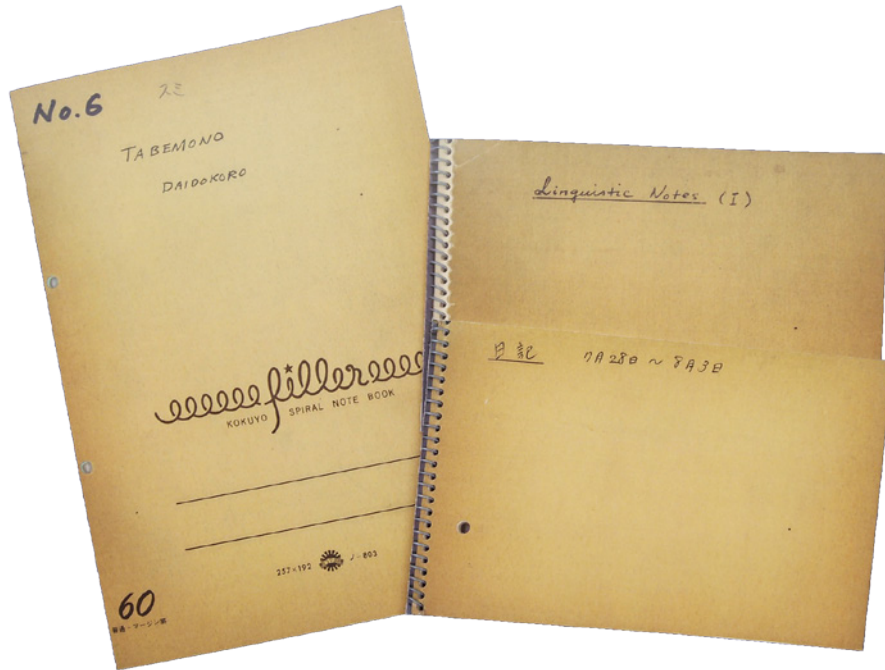
1944～45年 24歳のころ



現在の、中国内モンゴル自治区の東スニト旗と西スニト旗あたりを半年かけてゆっくりと調査したときのノートです。0番から48番まで通し番号をつけて整理してあります。このうち、ウメサオの書いたフィールド・ノートは33冊です。47番と48番の2冊は、出かけるまえに日本で書いたもので、モンゴルに行ったらいろいろと調べたいこと、研究したいことなどの希望が書かれています。22番のノートには調査日程や調査対象者の名まえが整理されていて、一覧できるようになっています。

アフリカのフィールド・ノート F0104

あるく、ウメサオタダオ展



1963 ~ 64年 43歳のころ



いまにしきんじ
今西錦司先生を隊長とする京都大学アフリカ学術調査隊に参加して、ダトーガと呼ばれるタンガニイカ（現在のタンザニア）の牧畜民について調査しました。B5サイズのリングノートやそれを半分に切ったのを、フィールド・ノート、日記、単語帳として利用しました。このB6というサイズが、調査のときにはいちばん扱いやすいようです。

山のスケッチ

F0105

あるく、ウメサオタダオ展



1935年 15歳のころ



スケッチブックの9ページにわたって、山のつらなりをえがいたスケッチです。中学4年生の夏、奈良と三重の県境にある大台ヶ原おおだいがはらに登り、すぐ西の大峰山系おおみねをパノラマでかきました。山の高さはすべて「尺」でしるされています。1尺はおよそ0.3メートルです。

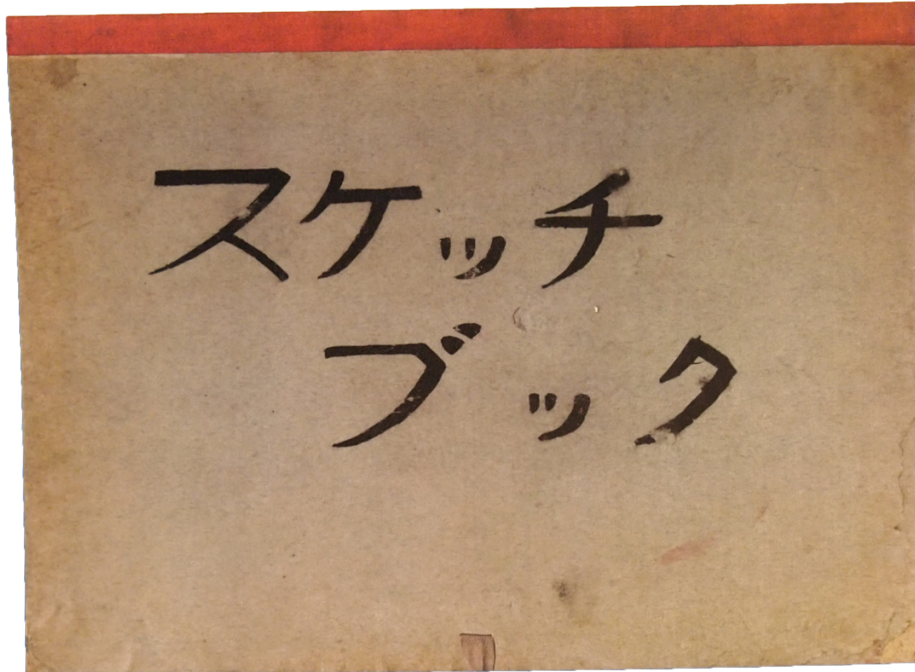
あるく、ウメサオタダオ展



1935年 15歳のころ



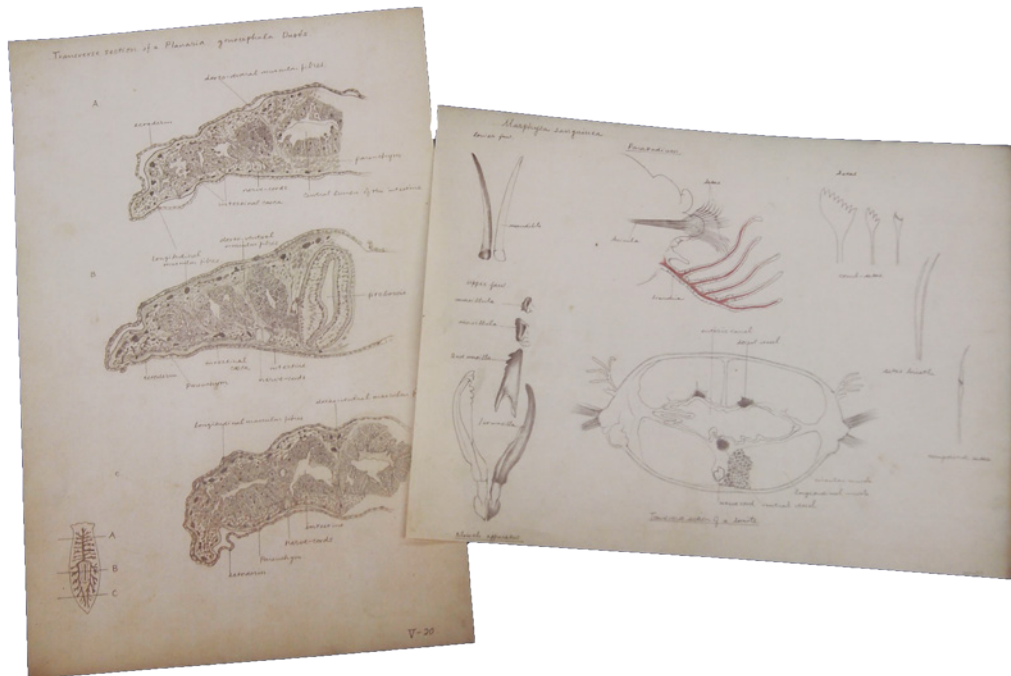
中学4年の2学期からは高校の受験勉強にはいるので、みずからリーダーとなって中学時代の最後の登山をしようと計画し、夏休みに友人たちと紀伊半島の山やまに出かけました。台高山脈と大峰山系を縦走する9日間の旅が写真で記録されています。写真アルバムには撮影年月日と撮影場所がかならず書きこまれています。



1940年 20歳のころ



高校生のころ、身のまわりのものをかたっぱしから絵にかいたことがあるそうです。ものを正確にみて、表現する練習だったといいます。そのおかげで、絵をかくことに少しも抵抗がなくなり、ひとになにかを説明するとき、ことばではなかなか表現できないことでも、絵にするとよくわかってもらえたそうです。



1941～42年 21歳のころ

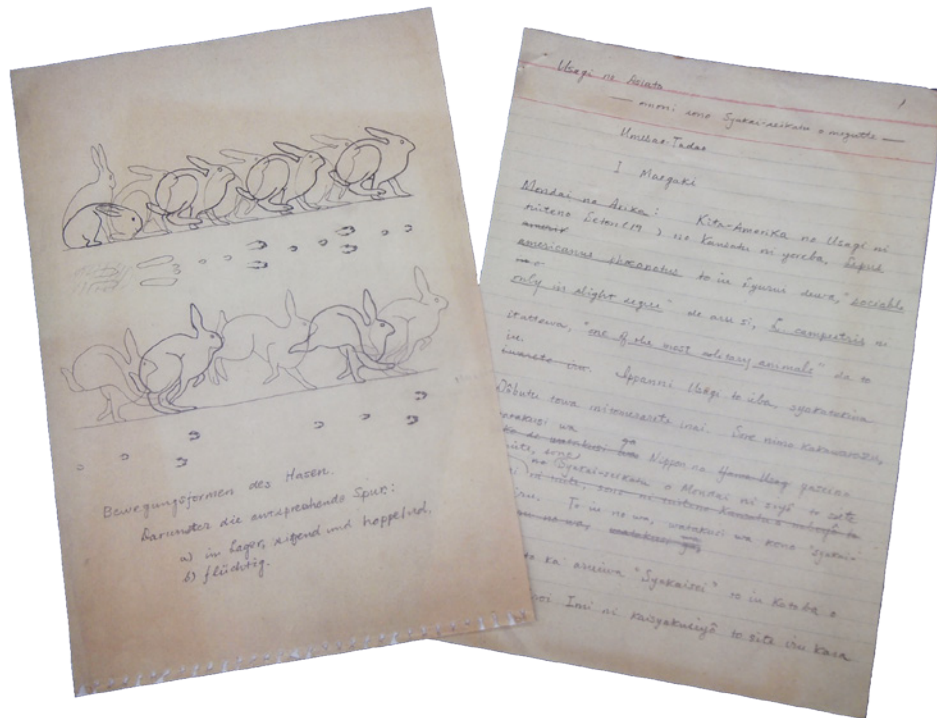


大学では動物学を専攻したので、絵をかくことが多かったそうです。分類学実習や組織学実習の時間には、プランクトンなどを顕微鏡でのぞきながらえがきました。顕微鏡を左目で見て、見えているかたちをそのまま右目を見ひらいて絵にするのだそうです。4H ぐらいのかたい鉛筆をつかいました。

ウサギの足あと

F0109

あるく、ウメサオタダオ展



1942～43年 22歳のころ



冬には毎年のようにスキーに行っていた信州^{わらびだい}蕨平でウサギの足あとを発見。そこからウサギを観察し、足あととからだの動きを、まるで動画のように絵であらわしたのです。ウサギたちはお互いにどんな距離を保ちながら行動しているのか、足あとから想定し文章にまとめようとしたのですが、未完成のままです。これがその原稿です。ローマ字をつかって日本語で書いています。

モンゴルのスケッチ

F0110

あるく、ウメサオタダオ展



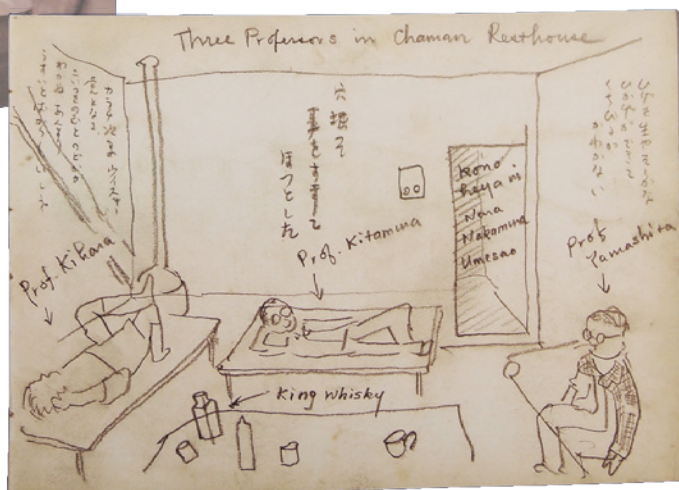
1944～45年 24歳のころ



モンゴル調査のときには写真フィルムが手に入りにくい時代でしたので、カメラをあまり使いませんでした。そのかわりに、たくさんのスケッチで記録しました。A5サイズの画用紙にモンゴルで使われているさまざまな道具がスケッチされています。道具の材質、大きさ、使いかたや現地での呼び名も小さな部分までくわしく聞いて記録されています。

ヒンズークシ隊のスケッチと写真 F0111

あるく、ウメサオタダオ展



1955年 35歳のころ

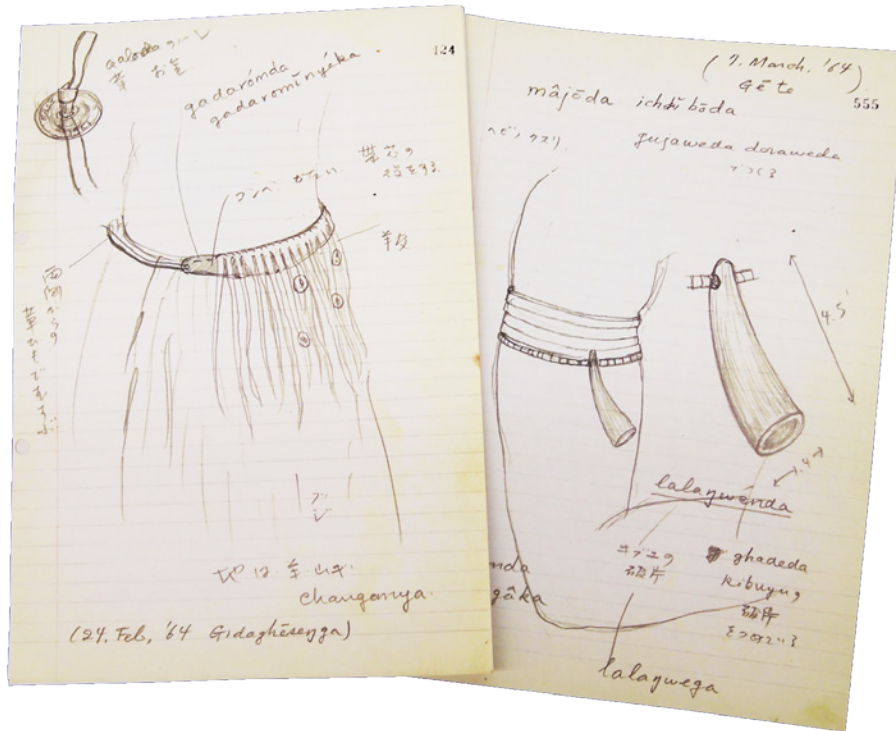


きはらひとし
木原均先生を総隊長とする、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加し、ヒンズークシ隊の人類学班に所属し、モゴール族の調査をおこないました。アフガニスタンとの国境付近にある、パキスタンのチャマンの宿舎でのようすです。写真とスケッチを見くらべると、スケッチの場合、いろいろな書きこみができることがよくわかります。

アフリカのスケッチ

F0112

あるく、ウメサオタダオ展



1963～64年 43歳のころ



いまにしきんじ
今西錦司先生を隊長とする京都大学アフリカ学術調査隊に参加して、ダトーガと呼ばれるタンガニイカ（現在のタンザニア）の牧畜民について調査しました。写真フィルムもふんだんにつかえる時代でしたが、器物の大きさ、細かい部分の表現やことばでの注釈も書きこめるので、B5サイズのリングノートをつかって、さまざまなものをスケッチしました。

ウメサオ検定写真

F0113

あるく、ウメサオタダオ展



ローマ字カード

F0114

あるく、ウメサオタダオ展



1946年 26歳のころ



フィールド・ノートに書いてある内容は、小さなサイズのカードに書きうつします。そして、同じ内容のカードを集めます。それらを小さな袋に入れてまとめます。こうして整理しておく、膨大な情報がテーマごとにまとまってくるのです。ワープロのない時代でしたから、タイプライターを使ってローマ字で書きました。フィールド・ノート25冊分の内容が約5,500枚のカードとなりました。袋は新聞紙などを使った手づくりです。

手がきカード

F0115

あるく、ウメサオタダオ展



未使用の京大型カード

F0116

あるく、ウメサオタダオ展

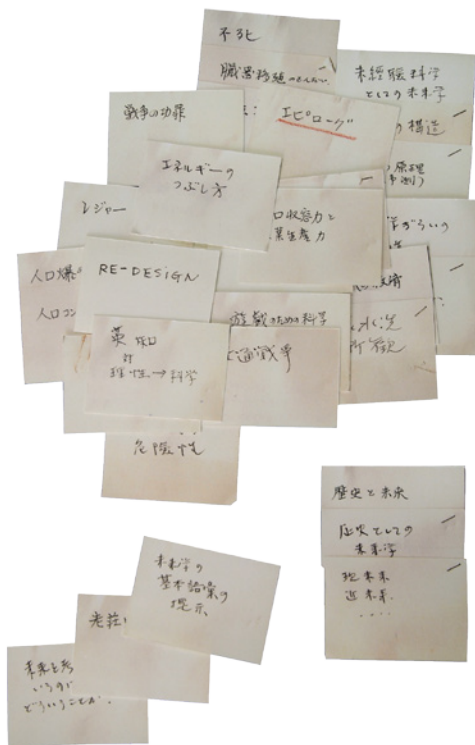


1964～65年 44歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）では、ノートからカードに転記するかわりに、直接、カードに記録していくことを提案しました。京都大学人文科学研究所の共同研究会でも、直接カードに記録する方法がおこなわれていました。梅棹がいろいろためしたのち決定したカードは、105kgの画用紙をB6サイズに切り、裏にうすい青色で線を印刷したものでした。それをずっと特別注文しつづけています。B6サイズのカードは、当時は「京大型カード」、いまは「京大式カード」という名まえで市販されていますが、梅棹のカードとは別ものです。

あるく、ウメサオタダオ展



1964～65年 44歳のころ



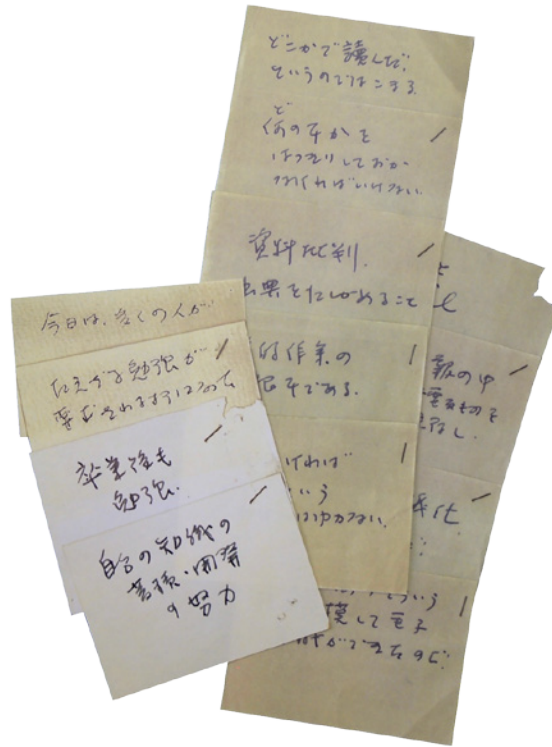
『知的生産の技術』(1969年)で紹介されている「文章の書きかた」に「こざね法」というのがあります。ひとつのテーマについて文章を書くとき、ばらばらに湧いてくる発想を順序かまわず、ひとつずつ小さな紙に書きつけます。単語でも句でも、短い文章でもいいです。それらを広い場所に並べてみます。そのなかから、つながりのあるものをすじがとおりそうな順番に並べようと提案しました。この小さな紙を「こざね(小札)」と呼び、この方法で文章作成することを「こざね法」と名づけました。

「こざね」とは、中世のよろい鎧をつくっている小さな板のことです。

こざねのつらなり

F0118

あるく、ウメサオタダオ展



1964～65年 44歳のころ



書くべき内容に関係のあることがらを1枚の小さな紙きれ「こざね」に書きます。そういう紙きれをつぎつぎと作ります。それらを広げて、論理的につながりがありそうなものを、論理的にすじがとおるような順番に並べかえながら、こざねをつないでいきます。すると、書こうとしていた内容がまとまり、すじがきができあがります。これで一気に文章を書くことができます。

「犬橇の研究」『探検』第3号 F0119

あるく、ウメサオタダオ展



1943年 23歳のころ



1940～41年の冬、高校生であるにもかかわらず、京都探検地理学会の調査隊に参加し、イヌぞりに関する論文を書きました。「犬橇の研究——主として樺太の犬橇の形態と機能について」という論文は、『探検』という専門雑誌に掲載されました。これは梅棹忠夫にとって最初の学術論文です。いずれは自分がイヌぞりで南極探検をおこなうつもりだったそうです。本人は南極へは行けませんでした。1956年におこなわれた日本最初の南極調査ではイヌぞりが導入されて、タロ、ジロなどのカラフト犬たちは南極で活躍したのです。

岩波書店『知的生産の技術』 F0120

あるく、ウメサオタダオ展



1964～65年 44歳のころ



『知的生産の技術』(1969年)では、ひとつのテーマについて資料をまとめるとき、ばらばらにならないようにファイルする(くくる、とじる)ことを提案しました。梅棹はA4サイズのフォルダーを特別注文していましたが、見だしさえ書いてあれば、紙袋に入れてもかまいません。関係あるものを整理し、見だしのついた入れものに入れて管理するのです。現在では、コンピュータで情報をつかうとき、データを「ファイル」としてやりとりしています。

京都大学ヨーロッパ学術調査隊 (第2次) 1969 F0121

あるく、ウメサオタダオ展



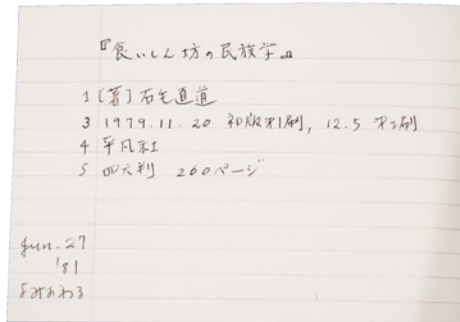
1969年 49歳のころ



ヨーロッパの大都会ではなく地方のひとは、どんな暮らしをしているか、何をたべているかといった日常生活を知るために、イタリア中部の山村とユーゴスラヴィア山岳地帯での生活を観察しました。一件ファイルには、そのときの計画書、準備会議資料、現地との手紙、案内パンフレット、現地で手にいれた資料、報告書の予定など、まさにこの件に関係したすべてのものが入っています。

読書カード『食いしん坊の民族学』F0122

あるく、ウメサオタダオ展



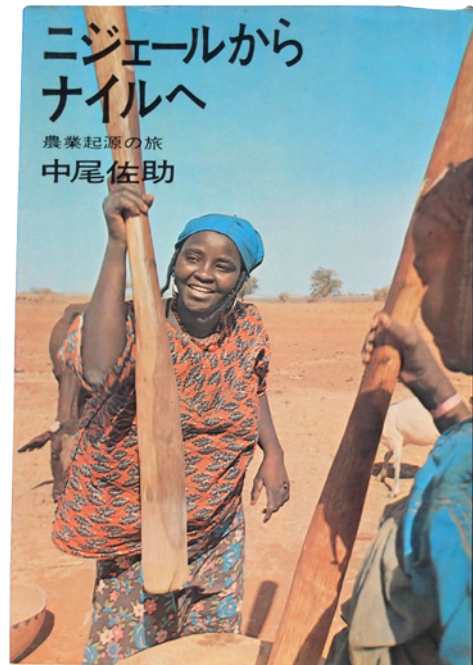
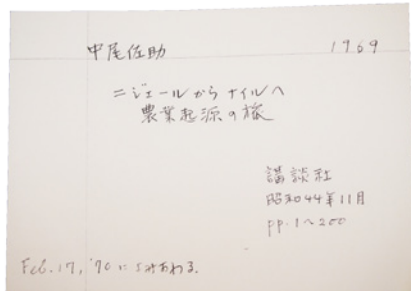
1966年 46歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）では、読書の習慣をつけるために、読んだ本のことを記録しておくようにすすめました。本についての感想よりもむしろ、本についての情報を書くように提案しました。出版社の名まえや出版年などの記録のことを書誌情報といいます。こうした情報があれば、現在なら、いつでもインターネットで検索することができます。しかし、何を read したかという自分のことは、自分で記録するほかありません。

読書カード『ニジェールからナイルへ』F0123

あるく、ウメサオタダオ展



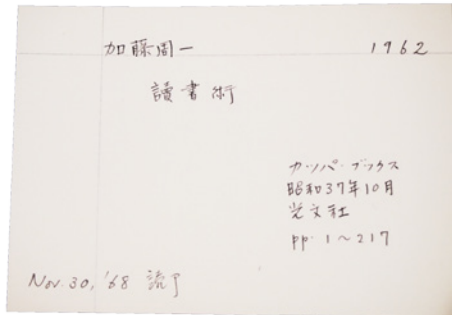
1966年 46歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）では、読書の習慣をつけるために、読んだ本のことを記録しておくようにすすめました。本についての感想よりもむしろ、本についての情報を書くように提案しました。出版社の名まえや出版年などの記録のことを書誌情報といいます。こうした情報があれば、現在なら、いつでもインターネットで検索することができます。しかし、何を read したかという自分のことは、自分で記録するほかありません。

読書カード『頭の回転を良くする読書術』F0124

あるく、ウメサオタダオ展



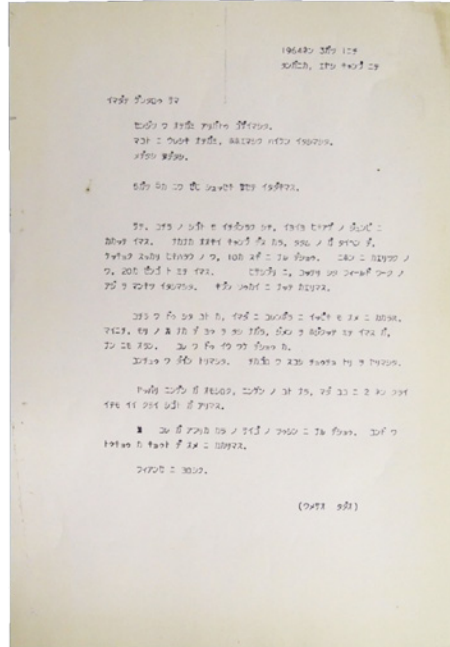
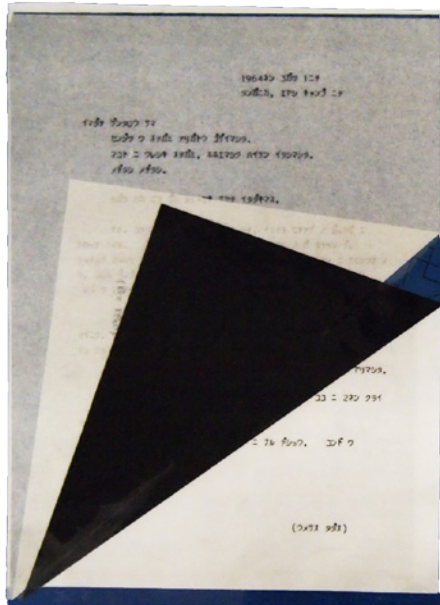
1966年 46歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）では、読書の習慣をつけるために、読んだ本のことを記録しておくようにすすめました。本についての感想よりもむしろ、本についての情報を書くように提案しました。出版社の名まえや出版年などの記録のことを書誌情報といいます。こうした情報があれば、現在なら、いつでもインターネットで検索することができます。しかし、何を read したかという自分のことは、自分で記録するほかありません。

カーボン・コピー/アフリカからの手紙 送り F0125

あるく、ウメサオタダオ展



1963年 43歳のころ

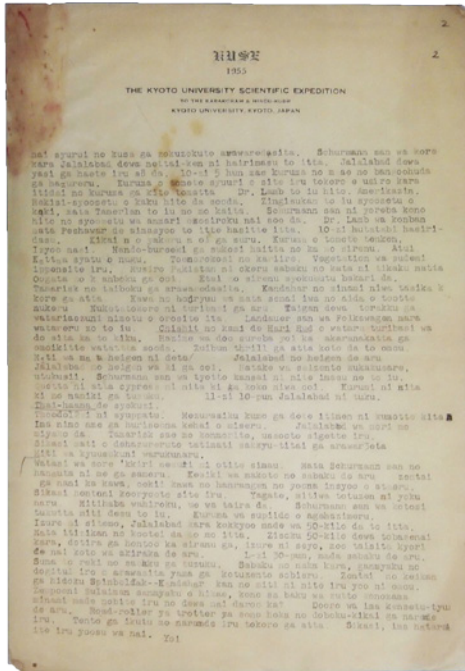
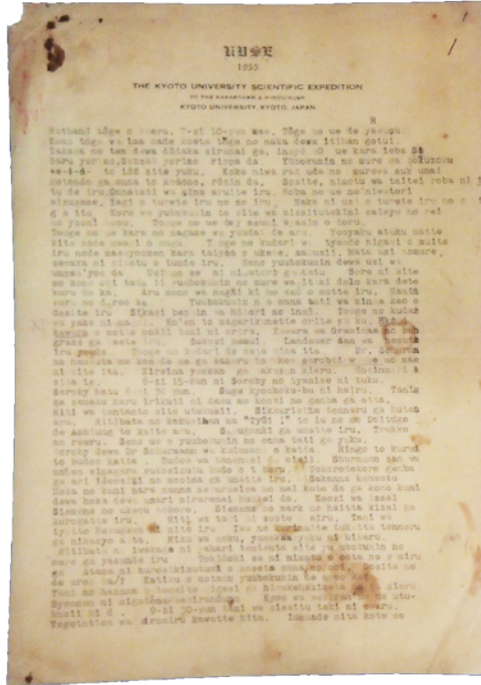


いまにしきんじ

今西錦司先生を隊長とする京都大学アフリカ学術調査隊に参加して、ダトーガとよばれるタンガニイカ（現在のタンザニア）の牧畜民について調査しました。このとき、調査基地ではカタカナのタイプライターをつかって手紙を出しました。2枚の紙のあいだにカーボン紙をはさんで印字したので、人に出した手紙のコピーを残しておくことができました。現在、メールで「CC」というのは、カーボンコピー（Carbon Copy）のことです。

「カイバル峠からカルカッタまで」のローマ字原稿 F0126

あるく、ウメサオタダオ展



1955年 35歳のころ



『インドから熱砂の国へ』(1962年)の本のなかに「カイバル峠からカルカッタまで」という旅行記があります。これは、1955年に京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加した帰り道の記録です。ひざの上にタイプライターをのせて、つぎつぎと変わる風景をゆれうごく車のなかで記録してゆきました。タイプライターをつかってローマ字で打った文と、本になった文を読みくらべてください。ほとんど同じです。現在なら、人びとはツイッターで刻々と変わるようすを発信することができます。

『知的生産の技術』元原稿/オリジナル原稿用紙 F0127

あるく、ウメサオタダオ展



1969年 49歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）の手がき原稿が残っています。出版社から印刷所に回された原稿を返してもらって、自分で製本し、残しておいたのです。一般に作家たちは四百字の原稿用紙をもちいますが、梅棹は二百字の原稿用紙を特別注文していました。『知的生産の技術』（1969年）では、「もし日本語がタイプライターで書けたら、原稿用紙はもういらないうらう」と書いています。日本語のワープロが登場して漢字変換ができるようになったのは1978年のことです。

七つ道具解説タワー

F0128

あるく、ウメサオタダオ展



ウメサオタダオ年譜

F0129

あるく、ウメサオタダオ展



ウメサオタダオのあるいた地球 F0130

あるく、ウメサオタダオ展



教科書

F0131

あるく、ウメサオタダオ展



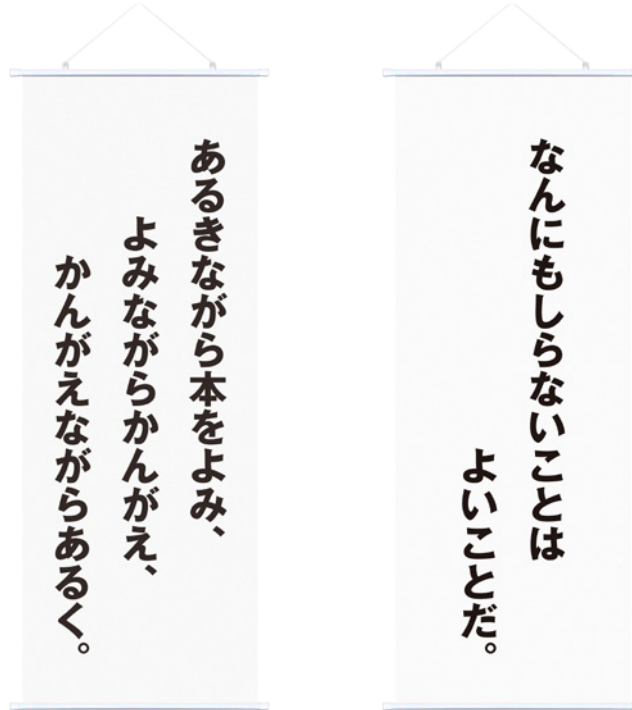
人型バナー/人型パネル

F0132

あるく、ウメサオタダオ展



あるく、ウメサオタダオ展



著作の森

F0134

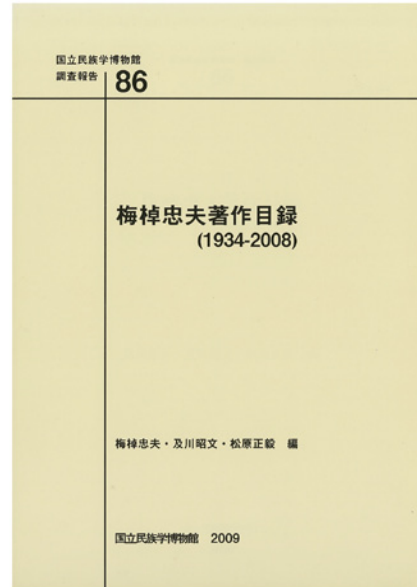
あるく、ウメサオタダオ展



あるく、ウメサオタダオ展



解説書
『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』



『梅棹忠夫著作目録（1934-2008）』
（『国立民族学博物館調査報告』86）



あるく、ウメサオタダオ展



今までの「みんぱっく」利用風景の写真や動画、メモなどの情報が入っています。情報が蓄積されていき、過去の利用風景を知るといった使い方ができるものです。この機能を楽しむ活用するために、みなさんにお願ひがあります。

「iPad」で利用風景を写真や動画で撮影し、自分たちの「使い方」を自由に記録に残してみてください。

みんぱっくを今回どのように活用されたか、ぜひ教えていただきたいのです。運営側のわたしたちは実際の活用現場を目にする機会がほとんどありません。

また、みなさんも他の方々がどのように活用されているかを目にする機会はあまりないと思います。

みんぱっくには使い方マニュアルがないので、同じパックでも使う人次第で、たくさんの利用方法が生まれます。

他の方々がどのようにみんぱっくを活用されているか、気になりませんか？

どのように活用いただいているのか、みんぱっくを使って笑顔になった瞬間をみてみたい、思いもよらない活用方法を実践された瞬間をみてみたい。

そんな気持ちでこの「iPad」を入れさせていただきました。

みんぱくとみなさん、利用者と利用者がつながり、次の未来へとつながっていけばいいと思います。

みなさんの利用風景を参考にし、新たな利用方法を伝えてみませんか。

みんぱっくがみんぱくをでていき、活用され、いきいきとしている現場をみせてください！

みなさんで次につなげましょう！